談話室

雨の表現からみた気候変動と林業経営

アジアモンスーン地域に位置し多雨な日本では、雨の表現が豊富だ。恵みの雨を意味する「慈雨(じう)」という言葉には忘れられない思い出がある。駆出し研究者だった大学院生の頃、歴史ある林業地である大分県日田地方のある林業家から、「林業家は雨の度に嬉しいんだ。何もしなくても、雨がスギの木を育ててくれる。まさに天の恵みでジウだ」といった話を伺った。「ジウ？」「ジユウ？」と聞き取れず、後日辞典でその言葉の意味を知った。慈しむように降る雨という表現に優美さを感じた。

また、日田地方といえば、直木賞作家である葉室麟の『霖雨』(りんう)という歴史小説の舞台でもある。霖雨とは、梅雨に長期に亘って降ったりやんだりする雨である。明治維新の胎動が始まった頃、画期的な教育を試みた私塾・咸宜園を主宰する広瀬淡窓とその弟で商家を継いだ久兵衛を描いた小説である。真摯に生きようとする兄弟に対して、お上からの理不尽な横暴が続く。世の中が変わろうとする中でどのように振る舞うべきか、忸怩たる思いを「霖雨」という言葉に重ねている。慈雨に比べると霖雨はマイナスのイメージがある。しかし、梅雨の雨は降ったりやんだりして、長期に降るものだったのである。

ところが、慈雨や霖雨と表現していた頃とは異なり、近年、雨の降り方が明らかに変わってきている。今や、雨というと災害を連想し、恐ろしさを感じるようになった。特に、梅雨明け頃になると、「線状降水帯」によるゲリラ豪雨が毎年のように発生している。地球温暖化が遠い異国の問題ではなく、日常的に私たちの生活を脅かすようになってきた。雨の表現からも気候変動を感じる今日この頃である。林業にとっても豪雨は経営リスクを高めるものとなっている。

大分県日田地方も、平成29(2017)年九州北部豪雨、令和２(2020)年７月豪雨と立て続けに被害が発生している。同市中津江村の林業家は、令和２年７月豪雨で時間雨量約110ミリ、24時間雨量500ミリ以上を経験した。1,200haの管理山林の中に35本、延長30kmの基幹となる４m幅の作業道とその支線作業道を整備し、間伐主体に年間5,000m^{3}程度の素材生産を行っていた。新たな取り組みとして、原木市場を通さず工務店や設計士への独自販路を確保して、林業の６次産業化

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

を本格化させようとした矢先だった。直営作業班で若手の林業従事者を確保し、機械化にも着手していた。数時間に集中して降った雨は、35本の基幹作業道のうち26本が法面崩壊、路肩崩壊、路面浸食などによって使用できなくなった。被災して１年経った本年７月に訪問した時には、幹線の作業道の調査が終わり、支線作業道の調査はこれからという段階であった。災害復旧作業と行政支援手続きを優先させるため、素材生産は約２年間ストップせざるを得ないとのことであった。林業経営に与えた影響は計り知れない。

令和３(2021)年春から、米国発の木材需要拡大によって、「ウッドショック」といわれるように木材価格が上昇した。川下の木材加工工場からは「山から木が出てこない」という声も聞かれる。しかし、生産したくても、この数年間の豪雨被害によって、生産活動の再開ができない林業経営者も多いのではないだろうか。

林野庁のホームページに掲載されている「災害情報」によると、平成29(2017)年から令和２(2020)年の４年間に、毎年１万箇所以上の林野関係被害が報告されている。最も箇所数、被害額ともに大きかった平成30(2018)年には、全国で19,025箇所2,570億円、うち14,684箇所458億円が林道施設等であった。被害額では林地荒廃(3,857箇所、1,965億円)の方が大きい。しかし、災害復旧にかかる費用に加え、道が通行できなくなることで木材販売収入が減少することを考えると、林業経営の意欲を削ぐことに繋がりかねない。

林業経営にとって林内路網は不可欠である。元通りにするという復旧だけではなく、激甚化する災害リスクに対して、どのような道と機械の組み合わせで伐採を行い、次にどのような森林を作りあげていくのか。今はまさに正念場である。環境の影響を強く受け、また自ら災害の誘因にもなり、同時に人々に恵みをもたらす森林を気候危機が身近に迫る中で、賢く利用する環境保全的な林業が求められる。

「慈雨」や「霖雨」といっていた頃を懐かしんでばかりはいられない。山地災害を研究する砂防学分野だけではなく、森林利用、造林、森林計画、森林政策といった森林諸科学の知見を総合した学際的な研究の必要性を感じている。

(九州大学大学院農学研究院 教授　佐藤宣子・さとう のりこ)

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/